

梶田叡一・中教審前副会長(教育課程部会長)著「あらゆる学習の基幹『言葉の力』を育てる―新学習指導要領と言語力―」日本教育総合研究所 2012年3月号を読む

「言葉の力」を育てるために

1. あらゆる学習の基盤となる「言葉の力」

- (1)①「言葉の力」は、あらためて言うまでもなく、あらゆる学習の基盤となるものである。
 - ②どのような教科・領域であっても、学習は言葉を媒介として行われる。教科書も教材も言語表現を中心としたものであるし、教師が説明したり指示したり励ましたりするの、言葉を用いてである。
 - ③さらに言えば、考えるということ自体が、そして認識するということが、自己の感性を通じて得たもの、他者によって言葉化されたものを自分なりに検討し、新たに言語化し直し、自分自身の内的概念体系に組み込んでいくことである。
- (2)①「言葉の力」は、日常的には、「話す」「聞く」「読む」「書く」という四つの活動の形をとって現れ、またそうした活動を通じて形成されていく。
 - ②文学的な領域に足を踏み入れるとすれば、これら四活動を土台とした、「味わう(鑑賞)」「創る(創作)」という活動をこれに加えることができるであろう。
- (3)①ここで問題となるのは、こうした諸活動のうち、どれを最も重要かつ基盤的なものとして取上げるか、ということである。
 - ②最近の国語教育では、自己表現との関連を含め、日常的な言語生活における発信力として、「話す」活動が重視されてきた。
 - ③また、コミュニケーションの土台となる力として、傾聴の姿勢と能力の形成を含め、「聞く」活動が重視されることもあった。
 - ④さらに現在、次の学習指導要領改訂の視点として、今後の国語教育における学力形成の基本ということで、「書く」と「読む」とが特に重視されている。

2. 「読む」ことの重要性

- (1)①私自身、ここに挙げた四活動、さらには文学的な力を含めた六活動のいずれもが、独自の重要性を持つことを十分に認めるものである。
 - ②しかしながら、学童期以降の「言葉の力」の発達にとって、「読む」活動こそが最も基本となるのではないだろうか。
 - ③テキストを入念に読み、その文字列に込められている意味空間を着実に読み取る、という訓練こそが何よりも大事だと考えるのである。
 - ④確かに、言語生活が乳幼児期の「聞く」から始まり、それを基盤として徐々に「話す」ことを覚え、自分の周囲の人達との間で「聞く」と「話す」を往復させていくことを通じ言語に関する一般的な感覚と能力を獲得していく、という発達の事実は踏まえなくてはならない。
 - ①しかし、言語的世界を一挙に広げ、言語的諸能力を一気に高めるためには、ある段階以降、「読む」ということが最も大切な活動となるのではないか、と思われるのである。
- (2)①もちろん「読む」活動と言っても、漫然としたものではない。朱子学を開いた朱熹が「読書三到」と言っているように、心を集中させ(心到)、眼を集中させ(眼到)、口を集中

させる(口到=気持ちを集中させた朗読)という形での熟読が望ましい。

- ②しかも「読書百遍義自ら見(あらわ)る」(三国志の中の魏志)と言われてきたように、繰り返し同じ基本テキストを読むことが大切である。
- ③そうすればまさに、熟読玩味と言われるように、テキストの意味を深く味わえるようになるであろう。

3. 熟読用テキストの準備と多読の勧めと

- (1)①こうした熟読を教育活動の中で行うためには、当然の事ながら、テキストの選択が重要な意味を持つ。
 - ②何よりも、繰り返しの熟読に耐えるものでなくてはならない。
 - ③昔は四書五経(『大学』『中庸』『論語』『孟子』と『易経』『書経』『詩経』『礼記』『春秋』)のように寺子屋の基本テキストともなるような古典があったが、現在の小学校では、これに匹敵するような古典は扱われていない。
 - ④教科書の編集に関わっている人に、そして現場で自主教材を創ろうと努力している人に、子どもが繰り返し熟読する対象となるような新たな古典の発見ないし創出を是非ともお願いしたいものである。
- (2)①熟読と並んで重要なのは多読である。広く本を読み、様々な情報や考え、表現に触れることは、「言葉の力」を付けていく上で重要な意味を持つ。
 - ②このためには、学校の図書室や公共図書館に親しむことを習慣づけたいし、本屋を回って新しく出た本を次々と手に取って中を覗いてみることの楽しさを、何とか子ども達に教えたいものである。
- (3)①多読する子とは、読書好き、本好き、の子どもである。そうした子どもを育てる上での重要な要素は、そうした本好きの大人が身近な所にいるかどうか、さまざまな本の面白さを折に触れ子どもに語ってやる人がいるかどうか、である。
 - ②教師自身が、本が大好きで、常に読書する習慣を持ち、ということではなくては、学校でこの意味での読書指導の実をあげることはできない。
 - ③したがって、教師自身が図書館に常日頃から親しむということであってほしいし、教師自身が本屋廻りを楽しみ、身銭を切って毎月何冊もの本を買い込んで読む、ということであってほしい。
- (4)①「言葉の力」は、まず、数多くの多様な言葉を知っていることである。
 - ②大事な言葉については、自分自身の実感世界と関わらせて、腹に落ちる形で納得していることである。
 - ③そして、言葉とその組み合わせを自分の頭の中でどう吟味検討し、どう筋道を付け、どう組み立てていくか、という思考力である。「読み」の学習をこうした展望のもとに行いながら、その基盤の上に、「書く」とか「創る」という情報発信力の育成を、また日常生活における「話す」「聞く」というコミュニケーション能力の向上を、望みたいと思う。

P8 ~ 9

[コメント]

ことばはすべての学習の基本。全教科で学習するすべての「ことば」を大切にし、正確に「理解」した上で、確実に「定着」させることが学力向上の第一歩。梶田先生のこの文章はその大前提をよく教えて下さる。